

## 叱責場面における親の不適切な養育行動と児童の怒り表出の関連

白百合女子大学大学院文学研究科\* 原山郁花

### Dysfunctional Discipline Practices and Children's Anger Expression in Middle Childhood

Graduate School of Literature, Shirayuri University, HARAYAMA, Ayaka

#### 要約

本研究では、厳しい養育行動及び緩い養育行動と児童の怒り表出の関連について調査を行った。小学校3年生から5年生の児童176名を対象に、児童の怒り表出、児童が認知する親の不適切な養育行動に関する質問紙調査を実施した。その結果、父親の厳しい養育行動及び、母親の厳しい養育行動は児童の怒りの抑制努力に負の関連を示し、母親の厳しい養育行動は児童の怒りの内在化に正の関連を示した。父親及び、母親の緩い養育行動は児童の怒りの抑制努力に正の関連を示し、母親の緩い養育行動は児童の怒りの内在化に負の関連を示した。また、父母の養育行動を同一のモデルで検討すると、父親の厳しい養育行動が児童の怒りの抑制努力を有意に予測し、母親の緩い養育行動が児童の怒りの内在化を有意に予測した。

**【キー・ワード】** 児童期, 感情制御, 厳しいしつけ, 甘いしつけ, 怒り

#### Abstract

This study investigated relations between dysfunctional discipline practices, harsh discipline and lax discipline, and children's anger expression in a cross-sectional design. 176 third through fifth graders rated their parents' dysfunctional discipline practices, and self-reported anger expression. Results indicated that father's and mother's harsh discipline were associated negatively with children's anger-control efforts, and mother's harsh discipline was associated positively with children's anger-in. Father's and mother's lax discipline were associated positively with children's anger-control efforts, and mother's lax discipline was associated negatively with children's anger-in. Structural equation modeling indicated that father's harsh discipline negatively predicted children's anger-control efforts, and mother's lax discipline negatively predicted children's anger-in.

**【Key words】** emotion regulation, anger, harsh discipline, lax discipline, middle childhood

---

\* 現所属：東京大学大学院教育学研究科

## 問題と目的

感情は、個人の状態を自身及び、他者に知らせるシグナルとしての機能を持つ。コミュニケーションを通じた感情の表出と解釈により、対人関係の調整や維持が日常的に行われていることが知られている。状況に適合した形で感情の強度や持続時間が調整され、表出されることは、個人の社会的適応や精神的健康の維持に重要であると考えられており、このような感情調整のプロセスは「感情制御」という構成概念として知られている (Gross, Richards, & John, 2006; John & Gross, 2004)。適応的な感情制御の獲得は、発達過程における重要な課題のひとつであるといえる。

感情制御の萌芽は乳幼児期に見られ、その後も連続的に発達し、関連する神経系が成熟するのは思春期以降である (Morris, Silk, Steinberg, Myers, & Robinson, 2007)。児童期になると、怒りの表出が周囲から支持されにくくなることから、子どもたちが怒り感情を隠すようになることが推察されている (Underwood, 1997)。実際に、感情制御が児童の社会的適応を左右する要因のひとつであるという報告もなされている (e.g. Katz, Settler, & Gurtovenko, 2016)。社会的適応問題が出現しやすい思春期の前段階である児童期は、問題の潜伏時期である可能性も推察されており、調査の必要性が指摘されてきた (Morris et al., 2007)。

対人場面で生じることの多い感情制御について社会的文脈の考慮は欠かせない (Cole, Martin, & Dennis, 2004)。感情制御の結果ともいえる感情表出のあり方は、文化的表示規則の影響を受けていることが指摘されている (Ekman & Friesen, 1969; 木野, 2000)。個人の感情制御は、脳の成熟や認知発達と相互作用しながら社会や文化により形成されると考えられる。個人が他者との相互作用を通して、感情表出に関する社会の価値や知識などを獲得する「社会化」の過程について調査していくことは、感情制御の発達を明らかにするために重要であると推察されている (Morris, et al., 2007)。

特に、親密な結びつきが見られる「重要な他者」による期待や評価が子どもに与える影響は大きい (Cooley, 1909; 大橋・菊池, 1970)。現代の日本社会では、家族の小規模化・核家族化により、子どもたちは小さな集団の中で社会化を受けており、親が及ぼす影響は、相対的に強まっていることが推察される (田中, 2018)。親子間では、感情を帯びたやりとりが繰り返され、様々な感情が表出されやすく (Steinberg & Morris, 2001)、親子の相互作用は、子どもに感情制御を教えたり、方略のモデルを示したりする機会となり得る (Morris, Cui, Criss, & Simmons, 2018)。

なかでも、叱責場面は親子両者の感情が揺さぶられる場面であり、重要な社会化場面のひとつであると考えられる。実際に、厳しい養育行動が感情制御の発達に阻害的に働く可能性が示唆されてきた (Wang, Wang, & Xing, 2018)。親子間でなされる、身体的・心理的な攻撃が他者との関わり方の基礎となり、家庭外の社会場面において子どもの負の感情が表出されやすい等の適応的でない感情制御を促進する可能性が推察されている (Parke et al., 1992)。一方で、子どもの行動に制限を設けない許容性の高い養育や、一貫性のない養育である「緩い養育行動」(lax discipline) については、子どもの感情制御との関連を報告している研究は見当たらない。しかし、社会的適応との関連は示されており (e.g. Akhter, Hanif, Tariq, & Atta, 2011; Dishion, Patterson, Stoolmiller, & Skinner, 1991)、叱責場面が感情制御の社会化に関連する場面であるとすれば、緩い養育行動も子どもの感情制御と関

連する可能性があると考えられる。例えば、子どもの問題行動に対して緩い養育行動がなされる場合、子どもは制限を受けるべき場面で、大人から制限を受けて自己を抑制する機会が失われてしまうということが考えられる。このように、緩い養育行動が感情制御の発達にネガティブな影響を及ぼす可能性について検討の意義があるといえる。

以上のことから、本研究では、子どもの感情制御の社会化プロセスを明らかにするために、叱責場面における厳しい養育行動及び、緩い養育行動といった不適切な養育行動と子どもの怒り表出の関連について検討する。ただし、厳しい養育と、緩い養育行動では、感情表出の異なる側面に影響を与えることが推測される。

仮説は以下の通りである。

仮説 1: 厳しい養育行動及び、緩い養育行動は、児童の怒り抑制と負の関連がある

仮説 2: 厳しい養育行動及び、緩い養育行動は、児童の怒り表出と正の関連がある

仮説 3: 厳しい養育行動は、児童の怒りの内在化と正の関連がある

## 方 法

### 協力者

近隣の公立・私立小学校に依頼し、小学校3年生、4年生、5年生を対象に、協力者を募り、176名が調査対象者となった。そのうち各尺度について、回答が4割以上欠測しているものを除いた、小学校3年生、4年生、5年生の児童157名（男子82名、女子74名、無回答1名；3年生13名、4年生67名、5年生77名）を有効回答者として見なし、分析対象者とした。調査時期は2019年10月～12月であった。

### 調査手順

小学校の授業時間の一部を使用し、質問紙調査を実施した。質問紙は一斉配布し、各設問について調査実施者が読み上げ、児童は一斉回答した。質問紙はすべて持参し、調査実施終了後直接回収した。

### 材料

#### (1) 怒り表出

The State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI) の怒り表出尺度 (Spielberger, 1988; 日本語版 鈴木・春木, 1994) を使用し、児童の怒り表出の様子について、児童本人が自己評価を行った。質問紙の項目については、協力児童にわかりやすい文章になるように部分的な修正を加えた。

#### (2) 児童が認知する親の不適切な養育行動

親の養育行動については、The Parenting Scale (PS; Arnold, O'Leary, Wolff, & Acker, 1993; 日本語版 井濤, 2010) を参考に作成した尺度を使用し、児童が認知する親の不適切な養育行動の測定をした。協力児童に分かりやすい文章になるように、表現等も部分的に修正し、質問項目のうち、“本意でないことを言う”など保護者の内面を問うような項目や“現実的な脅かしや警告を実行しない

ことがある”など、児童にとって判断の基準がわかりにくいと考えられる項目は、予め除外した。

### 倫理的な配慮

各小学校の学校長に対して研究趣旨を説明し、研究協力の依頼をした。交渉の過程において、質問紙上の教示や項目の表現に訂正を加えた。実施方法についても相談の上で検討し、協力校の学校長ならびに担任教諭の理解のもとに実施の同意を得た。児童には、個人の回答が無記名式であり、個人の回答が特定されることはないこと、質問紙への回答は任意であり、答えたくない場合や中断したくなつた場合には、回答をやめても不利益は生じないことを明記した上で、口頭でも質問紙調査実施者より説明を行った。本研究で得られた結果の一部は、全ての協力校に対してフィードバックを行った。なお、本研究は、白百合女子大学の人間総合学部「人を対象とする研究」研究倫理審査委員会の審査を経て、承認されたものである（第 20190001 号）。

### 分析方法

事前分析として確認的因子分析を行い、因子構造の確認をした。以降の分析で使用する各因子は、因子負荷量の高い 4 項目または 5 項目によって構成した。因子間相関で因子同士の関連性を確認し、共分散構造分析によりモデルの検討を行った。適合性に関して、明確な基準が存在していないことから、複数の適合度指標から適合性を判断した（豊田, 2014）。本研究では、 $\chi^2/df$ 、Comparative Fit Index（以下 *CFI* と表記する）、Standardized Root Mean Square Residual（以下 *SRMR* と表記する）Root Mean Square Error of Approximation（以下 *RMSEA* と表記する）を、適合度指標として用いた。 $\chi^2/df$  は 2.0 以下のときモデルの適合性が高いとされており、*CFI* は 1 に近いほどモデルの適合性が高く、*SRMR* は 0 に近いほどモデルの適合性が高い、*RMSEA* は 0.05 以下であれば当てはまりが良く、0.1 以上であれば当てはまりが悪いとされている（豊田, 2014）。分析には統計解析ソフト R のパッケージ“*lavaan*”を利用し、完全情報最尤推定法によって欠測値の処理を行い、母数を推定した。

## 結 果

### 事前分析

各尺度について、原版通りのモデルで確認的因子分析を行った。児童が認知する父親の不適切な養育行動及び、母親の不適切な養育行動のそれぞれについて、Parenting Scale 日本語版（井潤, 2010）の通りの 2 因子モデルで、確認的因子分析を行った。その結果、十分な適合度が得られた（ $\chi^2/df=1.19$ , *CFI*=.965, *SRMR*=.057, *RMSEA*=.035, 90%CI [.000, .056];  $\chi^2/df=5.34$ , *CFI*=.911, *SRMR*=.062, *RMSEA*=.051 (90%CI [.032, .069])）。

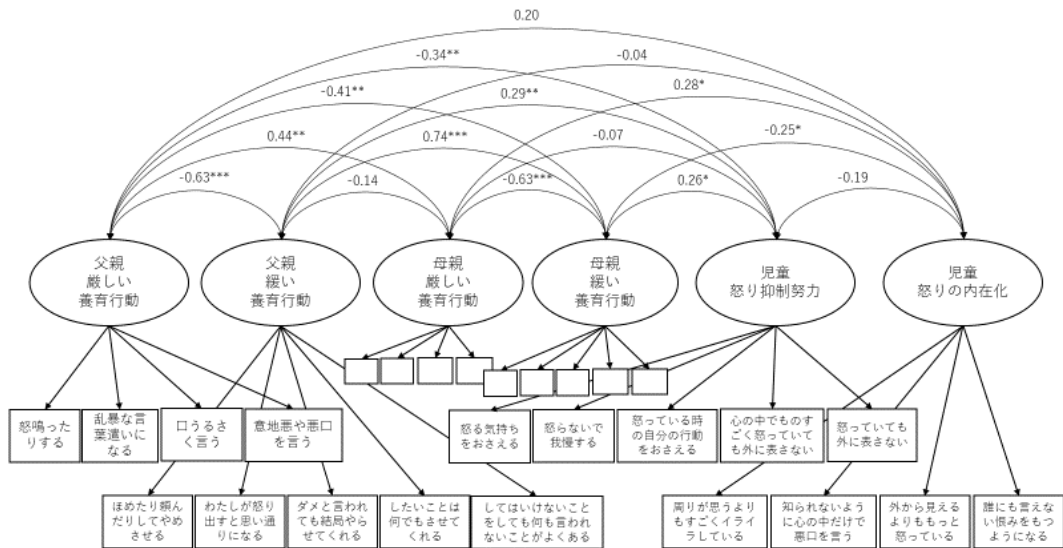
次に、児童が自己評価した怒り表出について、日本語版 STAXI（鈴木・春木, 1994）の 3 因子構造を確認的因子分析により検討したが、十分な適合度は得られず再現されなかった（ $\chi^2/df=2.47$ ,

$CFI=.686$ ,  $SRMR=.092$ ,  $RMSEA=.091$  (90%CI [.082, 0.100])。児童の怒り表出の因子構造を調べるため、探索的因子分析を行い、スクリープロットや因子の解釈可能性から2因子解を採用した。原版では、Anger Control (怒りの制御)に含まれていた項目と、Anger Out (怒りの表出)に含まれていた項目が逆転項目となって、本研究における第1因子を構成し(例:怒る気持ちをおさえる, 怒らないで我慢する, など), 原版で Anger In (怒りの抑制)に含まれていた項目が本研究における第2因子を構成した(例:周りが思うよりもすぐイライラしている, 誰にも知られないように心の中だけで悪口をいう, など)。よって, 第1因子を「怒りの抑制努力」と命名し, 第2因子を「怒りの内在化」と命名した。

以降の分析では、「父親の厳しい養育行動」「父親の緩い養育行動」「母親の厳しい養育行動」「母親の緩い養育行動」「子どもの怒りの抑制努力」「子どもの怒りの内在化」の6つの因子を使用することとした。

### 因子間相関

因子分析の結果から, 因子負荷量の高い4項目または5項目を観測変数として因子を構成し, 6因子の確認的因子分析モデルにより因子間相関を算出した(図1)。父親の厳しい養育行動では, 父親の緩い養育行動, 母親の緩い養育行動, 児童の怒りの抑制努力に関して5%水準で有意な負の因子間相関, 母親の厳しい養育行動に関しては有意な正の因子間相関が示された。父親の緩い養育行動では, 母親の緩い養育行動と児童の怒りの抑制努力に関して, 有意な正の因子間相関が示された。母親の厳しい養育行動では, 母親の緩い養育行動に関して有意な負の因子間相関, 児童の怒りの内在化に関して, 有意な正の因子間相関が示された。母親の緩い養育行動については, 児童の怒りの抑制努力と有意な正の因子間相関, 児童の怒りの内在化と有意な負の因子間相関が示された。



注1) \*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05 注2) 誤差変数は省略  
 注3) 母親の厳しい養育行動及び母親の緩い養育行動を構成する項目は父親の厳しい養育行動及び父親の緩い養育行動と同一

図1 因子間相関結果

モデルの検討

まず、父母の厳しい養育行動が高い場合、児童の怒りの抑制努力は低下する傾向、児童の怒りの内在化は上昇する傾向があると仮定して、共分散構造分析によってモデルの検討を行った(図2)。その結果、モデルの適合度は許容できる値であった( $X^2/df=1.83$ ,  $CFI=.871$ ,  $SRMR=.067$ ,  $RMSEA=.073$  (90%CI [.057, .088]))。ただし、父親の厳しい養育行動から児童の怒りの抑制努力へのパスのみが、5%水準で有意であった。父親の厳しい養育行動から児童の怒りの抑制努力へのパス係数は-0.38であり、父親の厳しい養育行動が高まることで、児童の怒りの抑制努力が低下することが示唆される。

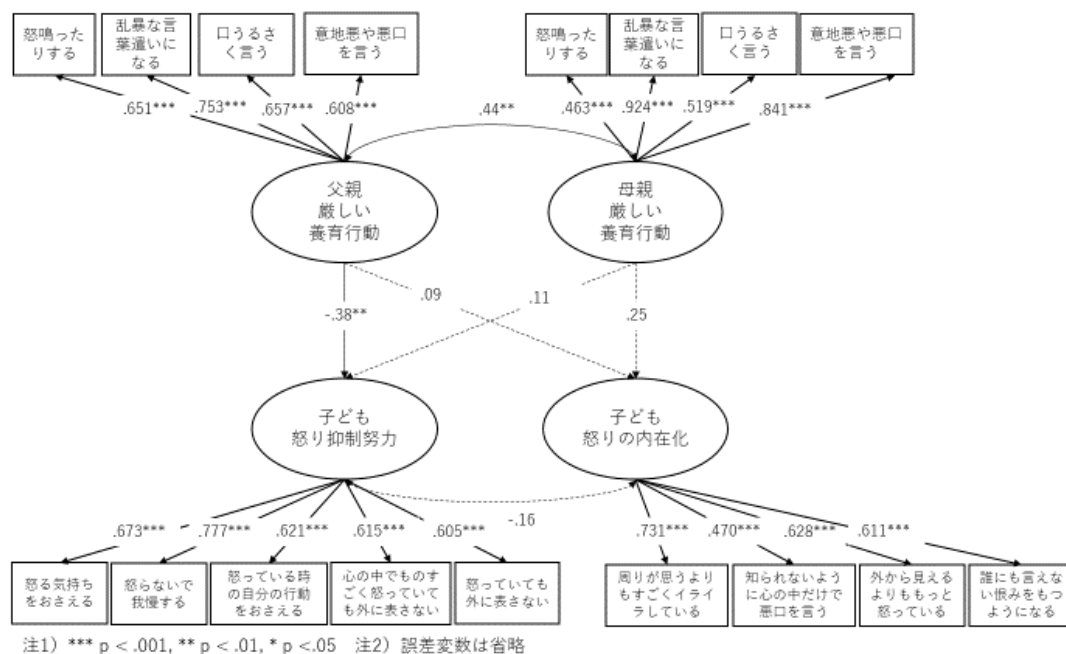


図2 父母の厳しい養育行動と児童の怒り表出に関するモデルにおける標準化推定値

次に、父母の緩い養育行動が高い場合、児童の怒りの抑制努力及び児童の怒りの内在化は低下する傾向があると仮定して、共分散構造分析によってモデルの検討を行った(図3)。その結果、モデルの適合度は許容できる値であった( $X^2/df=1.73$ ,  $CFI=.865$ ,  $SRMR=.066$ ,  $RMSEA=.068$ , 90%CI [.054, .082])。ただし、母親の緩い養育行動から児童の怒りの内在化へのパスのみが、5%水準で有意であった。母親の緩い養育行動から児童の怒りの内在化へのパス係数は、-0.46であり、母親の緩い養育行動が高まることで、児童の怒りの内在化は低下することが示唆される。

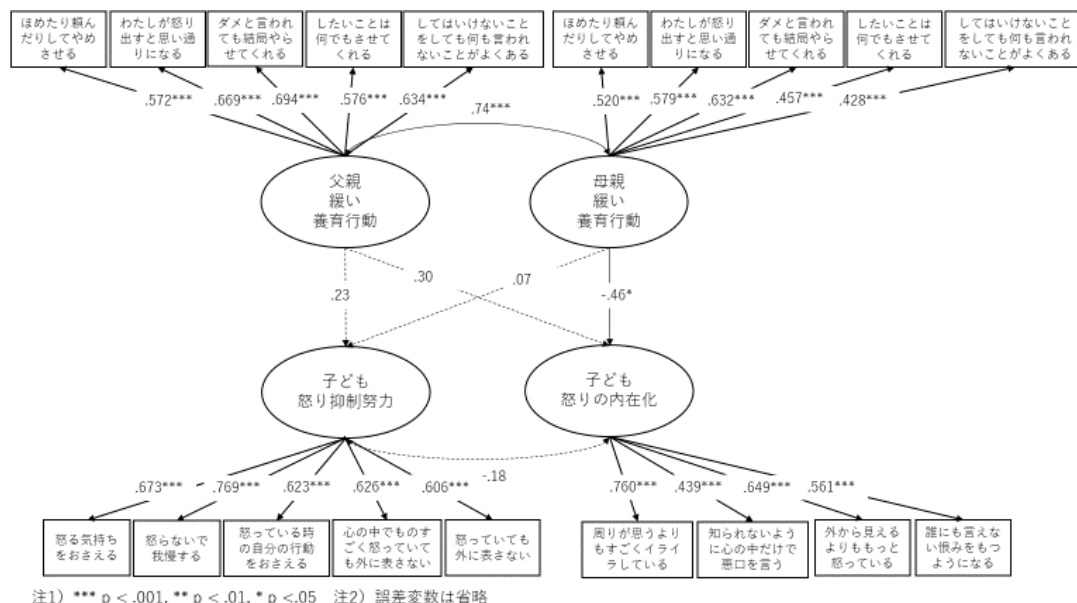


図3 父母の緩い養育行動と児童の怒り表出に関するモデルにおける標準化推定値

## 考 察

### 児童の怒り表出の因子構造について

本研究では、児童の怒り表出について、先行研究と異なる因子構造が確認された。STAXI について、対象年齢は明記されていないが、質問項目の内容から高校生以上が対象であると考えられている（吉田・堀, 2001）。児童期の認知能力は、発達途上であり、効果的な認知方略の使用が徐々に可能になる時期であるといえる（Band & Weisz, 1988; Pons, Harris, & Rosnay, 2004）。本研究で対象となっていた児童期の子どもでは、怒りをコントロールすることと、表出をしないように心がけることは、区別されず同じ因子が背景にあると考えられる。一方で、児童期の子どもにとって、怒りをコントロールしようと心がけることと、怒りを心の中に抱いたまま持続させるということとの間には区別がなされていることが示唆された。児童期の子どもでは、思春期以降に見られるような緻密な心的構造はまだ構築されていない可能性が推測された。しかしながら、本研究の分析対象者の数は 157 名であり、今後も児童期の怒り表出の因子構造を検討していく余地があると考えられる。

### モデルの検討について

本研究では、子どもの感情制御の社会化プロセスを明らかにすることを目的に、仮説の検討を行った。まず、厳しい養育行動については、児童の怒り抑制と負の関連、児童の怒り表出と正の関連、児童の怒りの内在化と正の関連があるという仮説を立てた。ただし、児童の怒り表出に関して、先行研究と異なる因子構造を採用したため、「怒り抑制」及び「怒り表出をしないこと」は、「怒りの抑制努力」という同一因子として扱った。因子間相関の分析結果から、父親の厳しい養育行動と児童の怒り

の抑制努力との間には有意な負の相関、母親の厳しい養育行動と児童の怒りの内在化との間には有意な正の相関が認められたことから、仮説は部分的に支持されたといえる。

母親の厳しい養育行動は児童の怒りの抑制努力と有意な因子間相関は示されなかったが、父親の厳しい養育行動は有意な負の因子間相関が示された。このことから、父親と母親で物理的な距離及び、心理的な距離が異なるために(戸田, 2009), 両親が似たような行動をとったとしても、それらの行動は、子どもにとって異なる意味をもつことが推察される。一般的に、父親は、母親に比べ物理的な距離及び、心理的距離が遠いために、厳しい養育行動に対して児童が敵意を感じやすいことが考えられる。Wang et al. (2018) では、母親に比べ、父親の厳しい養育行動は、敵意と認識されやすく、児童に感情的な興奮が引き起こされ、ストレス反応を生じさせる可能性が指摘された。頻繁なストレス反応は、感情制御の中核である前頭葉を委縮させ、感情制御の発達を阻害する可能性により、父親の厳しい養育行動と怒りの抑制努力の負の相関を部分的に説明することができると考えられる。

子どもの怒りの内在化については、父親の厳しい養育行動では有意な因子間相関が示されず、母親の厳しい養育行動で有意な相関を示された。母子関係では、両者の心理的距離が近いために、母親の厳しい養育行動を児童は敵意として認識することなく受け入れられやすいということが考えられる。しかしながら、母子は父子に比べ、長い時間を共に過ごすため、子どもは母親による厳しい養育行動に頻繁にさらされやすいことが推察される。日本の怒り感情の表示規則では、立場によって怒りが表出される程度が異なることが知られており、特に、目下の個人から目上の個人への怒り感情の表出は抑制されやすい(木野, 2000; Matsumoto, 1990; Matsumoto, & Kudo, 1996)。頻繁に起こる厳しい養育行動に対して、立場の弱い児童は、怒りを表出することなく叱責場面に対応することで、怒りを内在化させる感情調節のパターンを身につけやすいと考えられる。しかしながら、父母の厳しい養育行動と児童の怒り表出について作成したモデルの中では、母親の厳しい養育行動から児童の怒りの内在化へのパスは有意ではなかった。このことから、他の要因と同一のモデルで検討した際には、母親の厳しい養育行動にはそれほど意味のある効果はないということが示唆される。

次に、緩い養育行動については、児童の怒り抑制と負の関連、児童の怒り表出と正の関連があるという仮説を立てた。先述した通り、児童の怒り表出に関して、先行研究と異なる因子構造を採用したため、「怒り抑制」及び「怒り表出をしないこと」は、「怒りの抑制努力」という同一因子として扱った。因子間相関の分析結果から、父親の緩い養育行動と児童の怒りの抑制努力に有意な正の相関が示され、母親の緩い養育行動と児童の怒りの抑制努力の間に有意な正の相関、児童の怒りの内在化との間には有意な負の相関が示されたことから、仮説は支持されなかった。

仮説に反し、父母の緩い養育行動はどちらも児童の怒りの抑制努力と正方向に関連していた。児童が認知する緩い養育行動が、児童に対する温かさや理解、共感と重なる効果をもつ可能性が推測される。例えば、親の温かさは厳しいしつけにバッファー効果を与えることがいくつかの研究で報告されており(Deater-Deckard, Ivy, and Petrill, 2006; Grusec & Goodnow, 1994), おそらく児童が認知する親の養育行動の緩さには、親が子どもの行動に対してある程度制限を加えている上での緩さが想定されており、不適切な養育行動としての緩さとは、異質なものである可能性が考えられる。また、質問紙の項目には「(児童が) 行儀の悪いことをした時～」や「してはいけないことをした時～」という



表現が含まれており、児童自身が「注意されるべき」であるという認識をもっている行動に対して尋ねるような内容であったため、「不適切な緩さ」が測定できているかどうかは、検討の余地があるといえる。また、母親の緩い養育行動と子どもの怒りの内在化の関連については、仮説は設定されていなかったが、本研究の結果から、有意な負の相関が認められた。おそらく、児童が認知する母親の養育行動の緩さは、ある程度対等な関係性を背景に推測することで、怒りの内在化との負の関連を部分的に説明することが可能であると考えられる。

父親と母親の厳しい養育行動と子どもの怒り表出についてのモデルでは、父親の厳しい養育行動のみが、有意に児童の怒りの抑制努力を予測した。父親と母親の緩い養育行動と子どもの怒り表出についてのモデルでは、母親の緩い養育行動のみが、有意に児童の怒りの内在化を予測した。父親と母親を同一のモデルで検討することで、行動主体による効果の違いを確認することができたことは、本研究の重要な知見であったといえる。

### 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界について、第一に質問紙調査を用いた横断的研究であることが挙げられる。親の不適切な養育行動から児童の怒り表出への因果を想定し、モデルの作成及び、検討を行ったが、横断的研究であるため実際の因果効果については明らかになっていない。縦断的にデータを収集し親の不適切な養育行動から児童の怒り表出への影響を検討していくことが今後の課題である。

次に、児童の学年、性別、家族形態を考慮していない点が挙げられる。児童期の子どもの感情制御が発達途中であることから、年齢による感情制御のあり方の違いを丁寧に確認していくことは重要であるといえる。また、性別によって社会や文化から受ける社会化は異なる場合があることから、感情の表出に性差が見られる可能性がある。さらに、家族形態については、本研究から行動主体によって関連の大きさが異なることが示唆され、母子家庭や父子家庭では、親の養育行動が児童にとって異なった意味をもつ可能性があるといえる。異なる母集団について、親の不適切な養育行動と児童の怒り表出の関連を確認することを今後の課題としたい。

最後に、本研究では、怒り感情に限定した検討が行われていることが限界としてあげられる。叱責場面で親子に生じる感情は怒りだけとは限らない。叱責場面で生じるどのような感情がどのように制御されており、また叱責場面における感情制御が日常場面の感情制御とどのように関連しているのかということについて丁寧に見ていく必要があるといえる。加えて、今回対象とした児童の怒り表出については、児童の自己評価を用いて分析を行ったが、児童期の子どもがどの程度自分の怒り表出を客観的に捉えることができているかについては検討の余地がある。養育者や教師といった他者からの評価の使用、行動観察や生理学的指標などを用いて児童の感情制御を捉えて研究を行うことも今後の課題としたい。

## 引用文献

- Akhter, N., Hanif, R., Tariq, N., & Atta, M. (2011). Parenting styles as predictors of externalizing and internalizing behavior problems among children. *Pakistan Journal of Psychological Research*, 26(1), 23-41.
- Arnold, D. S., O'Leary, S. G., Wolff, L. S., & Acker, M. M. (1993). The Parenting Scale: A measure of dysfunctional parenting in discipline situations. *Psychological Assessment*, 5(2), 137-144. <https://doi.org/10.1037/1040-3590.5.2.137>
- Band, E. B., & Weisz, J. R. (1988). How to feel better when it feels bad: Children's perspectives on coping with everyday stress. *Developmental Psychology*, 24(2), 247-253. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.24.2.247>
- Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A. (2004). Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child development*, 75(2), 317-333.
- Cooley, C.H. (1909). *Social Organization; a study of the larger mind*. Charles Scribner's Sons.  
(大橋幸・菊池美代志 (訳) . (1970). *社会組織論* 青木書房)
- Deater-Deckard, K., Ivy, L., & Petrill, S. A. (2006). Maternal warmth moderates the link between physical punishment and child externalizing problems: A parent-offspring behavior genetic analysis. *Parenting: Science and Practice*, 6(1), 59-78.
- Dishion, T. J., Patterson, G. R., Stoolmiller, M., & Skinner, M. L. (1991). Family, school, and behavioral antecedents to early adolescent involvement with antisocial peers. *Developmental Psychology*, 27(1), 172-180. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.27.1.172>
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Nonverbal communication, interaction, and gesture*, 57-106.
- Gross, J. J., Richards, J. M., & John, O. P. (2006). Emotion Regulation in Everyday Life. In D. K. Snyder, J. Simpson, & J. N. Hughes (Eds.), *Emotion regulation in couples and families: Pathways to dysfunction and health*. (pp. 13-35). American Psychological Association. <https://doi.org/10.1037/11468-001>
- Grusec, J. E., & Goodnow, J. J. (1994). Impact of parental discipline methods on the child's internalization of values: A reconceptualization of current points of view. *Developmental Psychology*, 30(1), 4-19. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.30.1.4>
- 井澗知美. (2010). Parenting Scale 日本語版の作成および因子構造の検討. *心理学研究*, 81(5), 446-452.
- John, O. P., & Gross, J. J. (2004). Healthy and unhealthy emotion regulation: Personality processes, individual differences, and life span development. *Journal of personality*, 72(6), 1301-1334.

- Katz, L. F., Stettler, N., & Gurtovenko, K. (2016). Traumatic stress symptoms in children exposed to intimate partner violence: The role of parent emotion socialization and children's emotion regulation abilities. *Social Development, 25*(1), 47-65.
- 木野和代. (2000). 日本人の怒りの表出方法とその对人的影響. *心理学研究, 70*(6), 494-502.
- Matsumoto, D. (1990). Cultural similarities and differences in display rules. *Motivation and emotion, 14*(3), 195-214.
- Matsumoto, D., & Kudo, T. (1996). 日本人の感情世界. 誠信書房.
- Morris, A. S., Cui, L., Criss, M. M., & Simmons, W. K. (2018). Emotion Regulation Dynamics During Parent-Child Interactions. *Emotion regulation: A matter of time.*
- Morris, A. S., Silk, J. S., Steinberg, L., Myers, S. S., & Robinson, L. R. (2007). The role of the family context in the development of emotion regulation. *Social development, 16*(2), 361-388.
- Parke, R. D., Cassidy, J., Burks, V. M., Carson, J. L., & Boyum, L. (1992). Familial contribution to peer competence among young children: The role of interactive and affective processes. *Family-peer relationships: Modes of linkage, 107-134.*
- Pons, F., Harris, P. L., & de Rosnay, M. (2004). Emotion comprehension between 3 and 11 years: Developmental periods and hierarchical organization. *European journal of developmental psychology, 1*(2), 127-152.
- Spielberger, C. D. (1988). Professional manual for the state-trait anger expression inventory (STAXI). Tampa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Steinberg, L., & Morris, A. S. (2001). Adolescent development. *Annual review of psychology, 52*(1), 83-110.
- 鈴木平, & 春木豊. (1994). 怒りと循環器系疾患の関連性の検討. *健康心理学研究, 7*(1), 1-13.
- 田中理絵. (2018). 現代の家庭教育. 一般財団法人 放送大学教育振興会.
- 戸田まり. (2009). 親子関係研究の視座. *教育心理学年報, 48*, 173-181.
- 豊田秀樹. (2014). 共分散構造分析 [R 編]. 東京図書.
- Underwood, M. K. (1997). Peer social status and children's understanding of the expression and control of positive and negative emotions. *Merrill-Palmer Quarterly, 43*(4), 610-634.
- Wang, Y., Wang, M., & Xing, X. (2018). Parental harsh discipline and child emotion regulation: The moderating role of parental warmth in China. *Children and Youth Services Review, 93*, 283-290. <https://doi.org/10.1016/j.chilyouth.2018.07.035>
- 吉田富二雄, & 堀洋道. (2001). 心理測定尺度集 II. サイエンス社.

## 謝 辞

本研究にご協力いただきました児童の皆様及び保護者の皆様，小学校の先生方，また，研究へのご指導いただきました白百合女子大学大学院文学研究科秦野悦子教授に，深く感謝申し上げます。

本研究に助成を賜りました公益財団法人発達科学研究教育センターに心より御礼申し上げます。